



自己認識する動物

哲学から見た人間

野家啓一（学術会議第一部会員）



人間性の危機

- 人間は「自分とは何か？」と問わずにはいられない動物
- 人間の定義(動物 + α): 「理性的動物」「言葉をもつ動物」「道具を作る動物」
- 生命科学、脳科学、情報科学の発展
→ ヒト／動物、ヒト／機械のあいだ
- 「人間とは何か」が曖昧化した時代
→ 人間性のアイデンティティ・クライシス



身分け構造／言分け構造

- 身分け構造(市川浩)
 - 身体機能による環境世界の分節化
 - 生物学的欲求 (besoin) を軸にした世界の意味分化
- 言分け構造(丸山圭三郎)
 - シンボル操作による世界の分節化
 - 「非在の現前」; 過去、未来、虚構
 - 文化的欲望 (desir) による意味分化



鏡像段階:「自我」の成立

- <身分け>から<言分け>への転換
→ 自己意識の発現
- 鏡の中の像が「自分」と理解する
→ 生後6カ月から18ヶ月の乳幼児
→ 犬やチンパンジーには見られない
- 鏡像は「他人の目」から見られた自分
- 自己認識と他者認識は表裏一体
→ 社会化された「私」:「我々」の地平



ホモ・ロクエンス

- Homo loquens(言葉を話すヒト)
- ロゴス(理性／言葉)をもつ動物
- 物理的宇宙 → シンボルの宇宙
- 自己認識の深化
→ 「私」の使用:自己中心化／脱中心化
- 知識の共有、伝達、蓄積
- はなす／かたる:「今・ここ・私」からの離脱
→ 神話、伝説、宗教、物語り
- 欲求・欲望の言語化と拡大(虚栄心、名誉欲)



欲望の体系＝市民社会

- 伝統的社会から近代市民社会へ
→ 魔術からの解放＝欲望の解放
- 「欲望の体系」としての市民社会 (Hegel)
→ 活動と労働による欲望充足
→ 分業と商品交換の促進(資本制社会)
- 消費社会:欲望は他者の欲望を欲望する
→ 「消費者の欲求を文化産業は作り出し、操縦し、しつける」(『啓蒙の弁証法』)



欲望の抑制・制御

- 魂の思惟的部分と欲望的部分
→ 理性による欲望の制御(プラトン)
- 宗教的禁欲・倫理
→ 「神に似ること」、世俗内禁欲
→ 修行、出家、肉食禁止
→ 「渴しても盗泉の水を飲まず」
- 倫理の最終根拠としての超越的価値
→ 神、真・善・美・聖



神は死んだ(ニーチェ)

- キリスト教的禁欲は「生」への敵対
- ニヒリズムの到来(『力への意志』)
「至高の諸価値がその価値を剥奪されるということ。目標が欠けている。『何のために』に対する答えが欠けている。」
- ホモ・デメンス(錯乱したヒト) E.Morin
→破壊と無秩序を生み出す過剰的存在
→人口拡大、知的能力、技術、国家



ホモ・ナランス（物語るヒト）

- 物語り(narrative)の機能
 - 経験を組織化すると共に、世界を理解可能なものとし、現実を受容可能なものとする言説
- 「超越的価値」に基づく物語りの終焉
 - 「人間的価値」に基づく物語りの可能性
- 科学技術は事実を解明し、欲望充足の手段を提供するが、目的や価値そのものは創り出せない
 - 科学技術の成果を踏まえ、人類の未来を見据えた新たな「物語り」の創造



滅亡に臨む存在

- 人間: 自己認識＝死を自覚する動物
→ネアンデルタール人の葬送儀礼
- 「死へ臨む存在」であることを自覚することによって、人間はその本来的全体性を取りもどすことができる(M.ハイデガー)
- 地球環境の危機と人類の存亡
→人類が「滅亡に臨む存在」であることの自覚こそが、ニヒリズムの克服と未来への構想力(物語り)の礎となる

おわりに

「われわれはどこから来たのか、われわれは何者であるのか、われわれはどこへ行くのか。」

P. ゴーギャン

「私たちは、どこからきて、なぜここにいるのかを語る物語りをもたねばならない。」

E.O. ウィルソン『知の挑戦』